

陳舜臣さんを語る会通信

NO.99

Mar. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2023年3月1日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

中国の歴史と美術ほかエッセイ37編

『雲外の峰』

本号ではエッセイ集『雲外の峰』(1989 二玄社)を紹介いたします。次号以降、同じく二玄社発行のエッセイ集、『含笑花の木』(1989)、続いて『走れ蝸牛』(1991)を取り上げます。(編集委員 橘雄三)

本書誕生のいきさつ

『雲外の峰』(二玄社)「あとがき」(最後の三行削除)
小見出し、傍線は編集委員の加筆

個人全集を刊行するにあたって、編集関係の人が私の年譜を作ってくださった。それによると、エッセイがずいぶん多い。これは私には意外であった。雑文はできるだけ書かないと自戒していたからである。

一九八一年に出したエッセイ集『竹におもう』(六興出版)のあと、私には『六甲山房記』(岩波書店)、『シルクロード巡歴』(日本放送出版協会)、『シルクロード旅ノート』(徳間書店)、『東眺西望』(講談社)、『録外』(朝日新聞社)など数冊のエッセイ集があるが、すべて連載したのをまとめたものだった。ほうぼうに書いたのを集めたのではない。未収録の散文(文字どおり分散した文章)だけで数冊の分量になるということである。

私は整理が苦手で、手もとに切抜きや掲載誌がなくなっているものが多く、二玄社の宇和川準一氏を煩わして、集めていただいた。たいていそう迷惑をおかけしたのである。集めたものを読み返してみても、じつは私は安心してゐる。自戒のせ

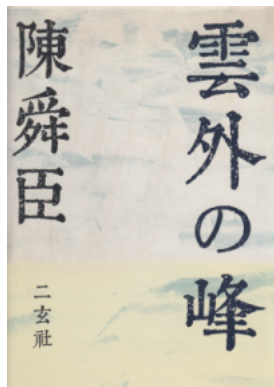
いもあって、いやいや書いたものはない。書きたいものを書いたのであり、連載エッセイと差別待遇をするのは、生みの親として不公平であるとおもった。それでここに上梓することにしたのである。たとえば画人と画工の差などのように、二つの篇に重ねて出てくる叙述もあるが、あくまでも独立した別篇の文章なので、あえて手を加えないことにした。

題名「雲外の峰」の意味

総題に困ったが、「雲外の峰」をえらんだ。齊白石展に寄せた小文のタイトルで、白石の詩から採ったのである。原意は文中にも説明したように、下から見えず、一般には理解され難いことだが、本書のタイトルとしての「雲外の峰」は、そんなたいそれたものではない。著者自身がずばらで、雲の外に抛りあげたままにして、ながいあいだまとめたままに文章の数々、という意味に流用したにすぎない。

一九八八年歳末

陳舜臣



二玄社版表紙

題		各編内容(一) ■はキーワード
I	現代とのつながり	陳舜臣さんは、「人間の尊重が人間主義的なルネッサンスを生み、現代のわれわれに魂のつながりをおぼえさせる。絢爛豪華とはいえないが、奥ゆかしい、偉大な時代であった」と宋代を評価する ■張昉端筆「清明上河図」『東京夢華録』
	明という時代	陳さんは、「こんな時代には生まれたくない」と明代を酷評する。同じく社会の下層から王朝の創始者となった二人だが、劉邦は陽気で朱元璋は陰惨だともいう。化け物のような宦官魏忠賢、東林・反東林、そして明清興亡までを略記する
	明清の興亡におもう	「明と清をくらべると、皇帝の資質に大きな差のあることが目立つ」と記述し、「清では名君の治世が長く、明では逆に、どうしようもない暗君の治世が長かった」と、康熙・乾隆両帝と万暦帝を比べる。満州族の擡頭・北京入城まで
II	肩の荷	『紅樓夢』と『細雪』とプルーストの一部を読み返し、かえって重くなった肩の荷
	なぜ人物論か	歴史上の人物にたいする関心は、危機の時代に深まる。明の李贄、後漢から三国にかけての郭泰、許劭らに言及 ■「月旦評」
	三国志と私	陳さんは物心がつくころから、祖父の書架の挿絵がはいった『三国演義』に親しんでいた
	詩人の旅	「古人も多く旅に死せるあり」。これは『おくのほそ道』の冒頭で、古人とは、西行や李白、杜甫を指すとされている。李白や杜甫の旅は、芭蕉のような風雅をもとめての旅ではなかった

『雲外の峰』 各編内容(二) 及び補足

	題	各編内容(二) ■はキーワード
II	秦婦吟	唐末の詩人、韋莊の作。唐の都長安にいた一人の女性が突然、黄巢の乱(875-84)に巻きこまれ流浪するいきさつを、彼女の口から語らせる長編叙事詩。「秦婦吟」の写本は亡失し、一点も残っていないと思われていたが、敦煌からあらわれた
	西遊記雑感	孫悟空は、日頃抑圧されている民衆にかわって、彼らの願望をみごとに果たしてくれる
	林則徐と語学	林則徐が、満州語研究に熱心だったわけ
	西郷隆盛と李鴻章	「私は李鴻章と西郷とのあいだに、心情的に相通じるものがあったのではないかという気がしてならない」
III	茶館の時代	老舍(1899-1966)の『茶館』について。第一幕は戊戌変法の年(1898)、第二幕はおなじ舞台の二十年後、第三幕はさらにその三十年後という設定
	魚文	「魚文」とは、焼きものや青銅器に描かれた魚やうろこの文様。ここでは、日本と中国との工芸における相違点が論じられる。■蘇州の虎丘、剣池 西安半坡博物館蔵の彩陶人面魚文鉢 明の魚藻文の大皿(大和文華館)
	黄河文明展をみて	黄河文明展 ■鎏金(りゅうきん)青銅馬
	壁にえがかれたもの	項目を列举します。屈原の『天問』と馬王堆の帛画 魏晉墓の磚壁画 唐墓壁画の世界 古代中国人の風景観 敦煌壁画にみる生活図と風景図
	翠青の時代	わが国には、国宝に指定されている青磁が三点ある。「飛青磁花生」(大阪市立東洋陶磁美術館蔵)、「青磁鳳凰耳花生」(久保惣記念美術館蔵)、「青磁下蕪花生」(アルカンシェール美術財団蔵)。三点ともに龍泉窯といわれている
	徐渭と董其昌	徐渭(1521-93)、董其昌(1555-1636)。共に『中国画人伝』に収録
	雲外の峰 一 齊白石展によせて一	1863-1957。田園生活での自然観察が身につき、蛙や蝦を描いたものに佳品が多い。その画業は世界的に知られる。『中国画人伝』に収録
	范曾展によせて	1938-。豊かな歴史的素養に基づいた人物画と、格調高い書に加え、詩や文章にも通じた“三絶の人”と称えられている。JR赤穂線西大寺に范曾美術館がある
	白鶴讃歌	住吉川のほとり、白鶴美術館の青銅器の"饕餮(とうてつ)"に言及



范曾美術館ホームページより「八仙図」

そんな中国社会にあって、
范曾さん(一九三八-)は、
画、書、詩すべてにすぐれた
「三絶の人」とたたえられて
いる。中国にもない范曾さん
の美術館が岡山市にある。こ
れにはビックリした。ただ、
残念なのは、西大寺観音院会
陽の行事にあわせて、年三日
間だけの開館であることだ。

画人と画工とを、厳しく区
別する伝統が中国に古くから
あった。絵画は対象に形が似
るよりも、氣韻(きいん)がそこにた
よっていることのほうを重ん
じたのである。形を似せるの
は職人仕事であると軽蔑した
ようだ。(p. 190)

「范曾展によせて」

右は「青花双魚文大皿」
(大和文華館蔵
『雲外の峰』カラー口絵より)
大皿があるが、そこにえがか
れている双魚は愛すべきもの
である。(p. 132)



「魚文」

右は、国宝「青磁鳳凰耳花生」
(久保惣記念美術館蔵
『雲外の峰』カラー口絵より)



「翠青の時代」

『雲外の峰』 各編内容(三) 及び補足

題	各編内容(三) ■はキーワード
海を越える民	タカラガイが無上の宝であった古代の中国、その産地であった琉球列島へと海を渡った
人のおくりもの	古来、日本は近隣諸国と外交上のつき合いをしてきたが、献上品とされた人たちがいた
鑑真和上の使命感に潜むもの	「縁あって、和上は日本へ来たのであるが、心中に燃えるものがある、はじめて縁をつかみえたのである。ものしずかに坐っておられる和上像のなかに、私は炎をかんじることが出来るが、炎を発する根源にふれることがまだできない」
揚州大明寺	「鑑真さんの故郷の揚州で、里帰りを迎えて法要がおこなわれたのは、ことし(1980)の四月十九日のことであった。私は朝日放送のゲストの資格で、法要の前日、上海から揚州に着いた。法要の場所は、かつて鑑真さんが律を講じていた大明寺である」
鑑真の息吹―唐招提寺―	「寺とその開祖との関係が、唐招提寺と鑑真和上におけるほど、わかちがたく緊密な例はほかにはないだろう」
きらめく星―わが空海―	「密教という信仰は、秘儀伝授によるので、とくに人物を得ることが要求される。九世紀のはじめに、空海という人物がいたことは、日本国のしあわせであったといわねばならない」
『曼陀羅の人』を書き終えて	六度目の新聞連載。1982年4月～83年7月、読売新聞
青龍岡に立って	「空海が学んだ青龍寺は、唐の長安城内の新昌坊にあった。青龍岡と呼ばれる小高い台地で、参詣者や行楽客でにぎわい、物売りもむらがった場所であったという」
日中往還の詩	唐の時代、阿倍仲麻呂など日本人の帰国を送る詩、あるいは唐人が日本に渡るのを送る詩など
交流のあとを訪ねて	「(日中)交流のにおいの最も濃厚な土地は寧波(にんぼう)であろう」■慧萼(えがく)
エネルギーの源流	14C～19C、海を渡った日本人■倭寇 勘合貿易 朱印船貿易 山田長政 大黒屋光太夫

文化

鑑真和上の使命感に潜むもの

像の里帰りに寄せて

唐と仏法の驕り予感

まだつかめぬ炎の根源

陳舜臣

1980.4.12 朝日新聞夕刊



唐招提寺講堂 編集委員撮影

揚州大明寺山門 編集委員撮影
正面上に「寺明大」の額

「鑑真の息吹―唐招提寺―」

「揚州大明寺」

